

1995年度 月刊誌「地域から日本を変える」バックナンバー

- [HOME /](#)
- [/ 年度別目次](#)

1995年 4月

松下幸之助の真語真髄

「墓は個別に必要か？」

上甲晃／松下政経塾元塾頭

いきなりお墓の話から始めて恐縮。

最近、夫婦で別々のお墓に入りたいと希望する人が増えていると聞く。特にその希望は女性の側に多いそうだ。生きている間は我慢に我慢を重ねてきたのだから、死んだあとまであなたと一緒にいたくないというのが理由とか。思わず涙の出そうな実感のこもった話である。

また、墓石も個性化の時代だと伝えられる。その人の生前の生き方を象徴したり、職業、趣味を表した造形美にあふれる墓石が流行りつつある。しかし、個人がみんな墓を造る時代になったら、日本の国は墓だらけにならないだろうか。「墓地立国」や「日本列島墓地改造計画」など、あまり夢あるプランではない。

松下幸之助塾主は、「墓は厳密にいうと必要ない」と言い切る。もっとも、いまそんなことを大きな声で言うと、無用な摩擦が起こるから言わないがと断る。

これは、日本列島が墓だらけになるからなどという現実的な見方から出た俗っぽい考えではない。先代、先々代をしのぶために墓を立てることは、ひとつの精神的な潤いとして認めている。しかし、「一万年前の墓はどこにもない。我々の血はもう何万年も前から続いているわけやから、何万代の墓がなければならんはずや。それをごく最近の先祖だけをまつることは不公平や」と言う。

最近の先祖も昔の先祖も先祖にかわりない。にも関わらず、最近の先祖は大事にして、昔、さらに大昔の先祖が忘れられているのはおかしいというわけだ。

「墓を立てるということは、日本に仏法が渡来してから千三百年ぐらいの間しかやっていない。それ以前の、何百倍、何千倍もある霊はどうなっているかというたら、言わばほったらかしになっている。そういうことを考えても、霊は個別に存在しないと解釈するほうがいい」。

我々が共に生きた人が亡くなる。思い出は生きている者たちの胸の中に個別にいつまでも生き続ける。だから、死んだ人の肉体と霊を結びつけて、霊もまた個別に存在すると考えて個別に墓を立ててきた。これは従来の既成概念である。

松下塾主の考え方は違う。先祖代々をどんどん遡っていくと、しまいには最初の先祖に行き着くはずだ。そして、その一番最初の先祖はもはや宇宙根源の力とも言うべきものである。我々はこの宇宙根源の力によって産み出され、そして宇宙根源の力に還っていく。

「まあ先祖代々の石碑というものを一本造っておけば、それはもう何十万年の間の先祖代々も含まれるし、その究極は宇宙根源の力に到達するわけやから、先祖代々のいっさいの人々を通じて、最高の神様というか、親元というか、根源力にまで到達して、それを拝み、敬意を表することになる」。

墓は個別に造るものだという既成概念を肯定して考えると、どこに用地を確保するか、材料はどこから手に入れるか、そんな次元の問題になる。松下幸之助発想は、もう一段深い。墓は個別に立てるものだとするいままでのものの考え方それ自体を疑ってかかっている。だから、とてつもない考え方が浮かび、思考の飛躍が生まれる。

あらゆる分野にわたり、我々は既成の概念を乗り越えられるか。まさに松下政経塾の真価が問われるところであり、松下塾主の望んだところである。

1995年4月執筆